

第26回特別展 小さな石のものがたり

石製模造品からみるぐんまの古墳時代

CONTENTS

目次

序章	小さな石の世界への招待	2
第1章	古墳に納められた石製模造品	6
第2章	居館とムラの石製模造品	13
第3章	石製模造品をつくる	23
終章	石製模造品からわかること	31

例言

- 本書は、かみつけの里博物館第26回特別展「小さな石のものがたり-石製模造品からみるぐんまの古墳時代」の展示解説書として編纂した。
- 本特別展の企画は、かみつけの里博物館で決定し、構成は横山千晶(本館主査)が行った。松田志保(本館主査)、中野成花(本館臨時職員)の協力を得、清水登(本館次長)が監修した。
- 本書の編集執筆は横山が行った。付帯事業として実施する講座発表要旨を付録に掲載した。
- 本特別展は、以下のとおり実施される。
 - 会期 平成29年10月28日(土)～平成30年1月28日(日)
 - 会場 高崎市立かみつけの里博物館
 - 付帯事業 (本館講座)
 - 平成29年12月3日(日)『群馬県の石製模造品』深澤敦仁氏(群馬県立歴史博物館)
 - 平成30年1月14日(日)『他地域との関係性からみた石製模造品における群馬県の特質』佐久間正明氏(公益財団法人県山田市文化・学び振興公社)
- 写真には提供者を明示した。提供者の記載のないものは、当館撮影または高崎市教育委員会の提供によるものである。
- 本特別展開催にあたり、下記の機関より後援を受けた。記して御礼申し上げます。(50音順敬称略)
 - 朝日新聞前橋総局・NHK前橋放送局・栃エフエム群馬・桐野まよみり新聞社・共同通信社前橋支局・群馬テレビ前橋支局・産経新聞前橋支局・JCOM群馬・時事通信社前橋支局・上毛新聞社・東京新聞前橋支局・高崎市民観光協会・毎日新聞前橋支局・読売新聞前橋支局・ラジオ高崎

特別展の開催にあたって

石製模造品とは、古墳時代を通じて、滑石などの軟質石材を用い、刀子、斧や鎌などの器物の形を模して、いくつかの場面で「まつり」の供物とされたものです。

この石製模造品は、古墳時代の幕開けから終幕までの間、概況として異種少量の大型精製品に始まり同種多量の小型粗製品へ移行しながら、配置された場面、品目自体とその組み合わせなどに地域的な特性を顕著できる変遷を辿ります。そこからは、地域間の結び付や生産と流通など古墳時代の多様な広がりを看取することもできます。『小さな石のものがたり 石製模造品からみるぐんまの古墳時代』と題したこの特別展では、館内および近隣の古墳、居館や集落、さらに祭祀遺跡などから出土した石製模造品とそれらに相伴した土器などを集めて展示し、小さな石に込められた古墳時代の人々が祈りに寄り添っていたと思います。

末筆ながら、この特別展の開催にあたり、ご協力いただいた各位・諸機関に厚くお礼を申し上げます。

2017年10月

高崎市立かみつけの里博物館 館長 鈴木 潔

古墳時代の上品といえば、勾玉が有名だが、じつは勾玉以外のものも数多く作られていた。では、どんなものを作っていたのか。そして、そこからどんなことがわかるのか。小さな石が伝える物語を探っていきよう。

(写真) 上から

- ガラス製勾玉 (保原田八幡塚古墳)
 - 珪石製勾玉 (お春古墳)
 - 滑石製勾玉 (西浦山古墳)
 - 滑石製勾玉 (西浦山古墳)
- すべて高崎市教育委員会蔵



滑石 英語名 taic (タルク)

モース硬度1の基準となる鉱物。カンラン石などの鉱物からなる岩石が、地中で熱水変成を受けて生じる変成岩で、滑石を多く含むものを滑石片岩という。銀のような光沢となめらかな手ざわりから「みう石」とも呼ばれ、かつては石版の筆記用具として使われた。現在でも工業用のチョークやパウダーなどとして使われている。

やわらかくて加工しやすいのが最大の特長。色は、白っぽいもの、緑っぽいものなどがあるが、おむね、白のものほどやわらかく、色が濃いものほど硬い。この石は、群馬県西部の蒲川流域など限られた場所でもしか産出しない。古墳時代の人々は、この石を求め加工して、石製模造品や生活用具など多くのものを作っていた。

序章

小さな石の世界への招待

滑石などのやわらかい石で、鉄などの金属で作られた道具をまねて作った道具を石製模造品という。実用品ではなく、古墳への副葬や、ムラでのマツリで使われた、祭祀具だったと考えられる。

石製模造品とは

「器物や人、動物などを石で小型に模造したもの。通常は古墳時代の祭祀具となったものをさす。前期古墳にある精巧な碧玉などの製品は石製品と呼んで区別する。(1)軟らかい滑石質の石材を材料とし、最初は数も少なく丁寧に作るが、やがて大量複製で種類も限定されるようになる。(2)まず古墳の副葬品にあり、ややおくれて祭祀遺跡から出土する。

(『日本考古学辞典』三巻章より抜粋)

●どうして模造するのか

初期の石製模造品は、古墳の副葬品だった。貴重な金属製品を埋めるかわりに、あるいは棺に納まらないなどの理由から、ミニチュアの模造品がつくれるようになった。

●模造の材料は

石製のほかに、粘土で作られたもの(土製)や、鉄製のものなどがある。

●なにを模造しているのか

初期の石製模造品には、鉄製の農具や工具を模造したものが多い。他に、鏡、剣、機織りの道具などを模造したものもある。全体的に、初期ほどじっくりと精巧で、次第に粗くなっていく。



(左) 井出二子山古墳出土石製模造品



土製勾玉 井出村東遺跡 保原田八幡塚古墳出土の鉄製農具・刀子 石熊館から出土した鉄製品。大きさが実用ではないと考えられる。



石製模造品 (茨木市金井山古墳・近つ飛鳥博物館蔵) 左上・左から5本・鋸、中央上・鏡、中央下・鏡、右・刀子



左から3本・斧、中央2本・鎌、右上・鋸、右下・鎌(2本)

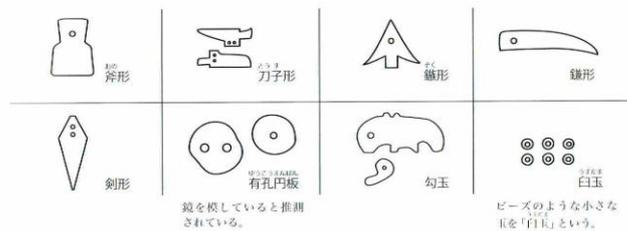
●どこから出土するのか

石製模造品の生産は、ヤマト(現・奈良県)で始まり、古墳築造の要請の一つとして上毛野(現・群馬県)に入った。その後、家族居館や集落にある祭祀遺跡などから出土するようになる。古墳時代に大噴火を起こした権左山の火山灰や噴火に伴う泥炭下の遺跡を調査すると、道や畑の脇、水田の水口、廃棄した竪穴住居など、さまざまな場所から石製模造品が出土する。



マツリを行う人々(模写)

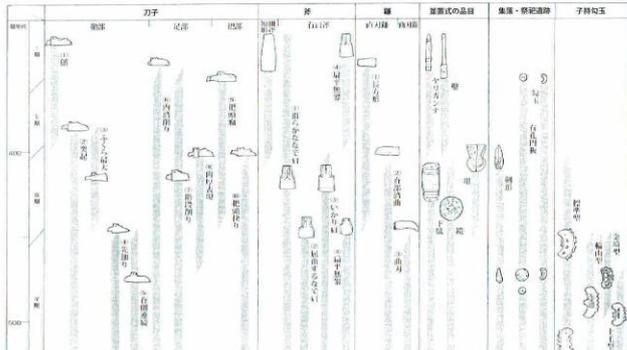
●おもな石製模造品の形



鏡を模しているかと推測されている。

ビーズのような小さな玉を「白玉」という。(白のような形から)

(石製模造品の形態別調査図(河野2002より転載))



序章 小さな石の世界への招待